
白夜叉降誕

空野弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜叉降誕

【Nコード】

N8911Q

【作者名】

空野弥生

【あらすじ】

銀さんの過去篇です。

原作を元にしてもいますが独断と偏見によるねつ造です。
楽しんで頂けるとうれしいです！

戦場の「鬼」(前書き)

おはこんにちばんは、テスト目前なのに投稿している空野です。Σ

〃w〃(汗

初投稿なので、拙い文章かもしれませんが、楽しんで頂けると嬉しいです。

よろしくお願いします！

戦場の「鬼」

ひゅう、と風が吹き抜けた。

秋の涼しい風が、銀髪の少年の頬を撫でる。

—こう書くと和やかな秋の風景を思い浮かべるかもしれない。
だが、少年の今いるところは戦場。

和やかどころか、不気味に思う人の方が多いだろう。

少年は銀髪で赤い目だから、なおさらだ。

そんな光景を見て、いつからか人々は少年を「鬼」と呼び始めた。
少年にしてみたらただ生きるのに必死だっただけなのだが、周りの
目はそうはいかない。

ただ少年にとって敵だらけのこの世界で生きるには、周りの目な
んて気にしていられない。

自分の敵は、とにかく斬る。

そうして己の身を守ってきた。

そうして必死に生きてきたからだろうか。

珍しく話しかけてくれる子どもがいた。

親子三人で歩いていたが、ふと目が合うと

「ちよつと待ってつかあさい」

と言って、こちらへ駆けてきた。

土手になっていたのだが、小石につまずくと

「ああああああああああ！！」

と盛大な叫び声をあげて、転げ落ちた。

「アッハッハー、やってしもーた」

と笑いながら近づいてくる。

―こいつは、敵？味方？

「えっ！？ちよっ……そんな構えんでええき」

警戒して刀を構えていたので、土佐弁の少年があわてて言う。

用件を三十字以内で簡潔に述べないと斬られてしまいそうなので、

「これを渡したかっただけじゃき」

と言って、笹の葉で包まれた何かを渡した。

「……おにぎり」

思わず銀髪の少年はつぶやいた。

ぎゅうう、とお腹が音を立てる。

「母上のおにぎりは宇宙一じゃ！特別にあげるぜよ！」

ほんじゃあ、と言うと土佐弁の少年は両親の所へ戻って行った。

危ないじやろっ、殺されでもしたらどうするんじゃ！と叱られてい

たが、土佐弁の少年はいたずらっぽく笑って、少年に手を振ってくれた。

―味方……？

「手を振る」というのがどういうことか少年は分からなかったが、他の奴とは違う、と思った。

いつもとちがう、少し暖かい気持ちで少年がくれたおにぎりを頬張った。

武士の魂（前書き）

いよいよ松陽先生と出会います！
どーぞ！！

武士の魂

銀髪の少年は、おにぎりを口いっぱい頬張った。
ちゃんとした食事なんて、何日振りだろう。

あの土佐弁の少年のことを考えると、初めて敵じゃない人に会えた
気がして、嬉しかった。

だからいつもより、ほんの少しだけ気が緩んでしまった。

そのせいだろう、いつもなら気づくはずの背後の気配に気づかなか
った。

ずん、と頭に重みがかかる。

見上げると、一人の侍がいた。

身長は高めで、栗色の長髪をしている。

先ほどの頭の重みは、この侍が少年の頭に手を乗せた重みらしい。

「撫でる」と言う方が正しいのだが、少年は「撫でられた」事なん
かないので分からない。

—こいつは、敵？

「屍くかばねゝを食らう鬼が出るときいて来てみれば……君がそう？」

「鬼」という言葉にピクリと反応する。

そう呼ばれた時は、大抵刀を抜かなければいけなかった。少年の気を知っているのか知らないのか、侍は話し続ける。

「またずい分とカワイイ鬼がいたものですね」

——こいつは、敵だ。

ぱしん、と手を払って、剣を抜いた。
シャラ、と独特の金属音が響く。

「刀くそれゝも屍くかばねゝからはぎとったんですか」

侍の雰囲気を押されて、思わず睨んでしまう。
自分の赤い瞳に睨まれて、逃げる者も少なくない。
だが、侍は優しい目で喋り続ける。

「童くわらしゝ一人で屍のみぐるみをはぎ、そうして自分の身を護つてきたんですか。……たいしたもんじゃありませんか」

だけど、と腰の刀に手をかける。

「そんな剣、もういりませんよ。他人くひとゝに怯え自分を護るためだけに使う剣なんて、もう捨てちゃいなさい」

チャツ、と侍の刀が鳴った。

―来るか？

少年は身構えた。

だが、少年の予想とは別に、侍は刀を鞘ごと投げ渡した。刀は重く、よろめきながらもなんとか受け止める。

「くれてやりますよ、私の剣」

そついうと侍は少年に背を向けた。

「剣くそいつゝの本当の使い方をしりたきゃ付いてくるといい。これからは剣くそいつゝをふるいなさい」

侍がゆつくりと歩き出す。

それに合わせて、鴉が一斉に飛び始める。

「敵を斬るためではない、弱き己を斬るために」

少年に言い聞かせるように、侍は立ち止った。

「己を護るのではない、己の魂を護るために」

正直少年には、侍が何を言いたいのかわからなかった。
だが、その背中では少年が覚えている誰よりも大きく感じた。
ここで付いていかないと後悔する、と直感した。

「なあ」

侍が振り向く。

—こうして、物語は幕を開けた。

武士の魂（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

感謝感激です。

それと、将来小説家になりたいので、宜しければコメントをおねがいします！

アドバイスや誤字脱字など、どしどし応募（？）おまちします。

帰る場所（前書き）

テスト終わりましたああ！ハ*ハ

なんだか話のペースがゆっくりな気がします……お気になさらず
（汗）

帰る場所

少年は侍の後ろをついていく。受け取った剣の重さが、少年のうでに容赦なくかかる。

刀に気を取られているうちに、屍の足につまづいた。

それを見かねて、侍は少年を背負う。

―少年の世界に、色がついた。

目線が変わるだけでただのススキ畑が、空が、いつもの風景が、鮮やかに見えた。

目線が変わったから、という理由だけでないのを少年はまだ気付かなかったが。

「そういえば、まだ自己紹介もしていませんでしたね。僕の名前は吉田松陽と言います。君の名前は？」

「鬼」と呼ばれ続けて、もう霞んできた記憶。
その中で、己を優しく呼ぶ声。

「……銀時」

「名字は？」

「わかんない」

「じゃあ……坂田銀時、なんてどうです？」

坂田金時と言う侍が昔居たんですよ、と侍―松陽は言う。

「……そいつ、かつこいいの？」

松陽が思わず吹き出す。

（子供らしい所も、ちゃんとあるんですね……）

「……なんで笑うんだよ」

少し顔を赤くして、銀時が拗ねたように言った。

（一体、誰が鬼なんて呼び始めたんでしょうね……）

鬼なんかじゃ無い。少なくとも松陽には、なんの変りもない、ただの子どもにみえた。

だから、護らなくてはいけない、と感じた。

銀時の身を護ってやる事は出来る。

いや、むしろ銀時なら自分が護らなくても平気かもしれない。だが、己の魂を護れるのは、自分自身しかない。

今教えなかったら、己の魂を護る事を誰が銀時に教えるだろう。

「……大丈夫です、僕がついてますから」

「……？」

松陽が何を考えているのか、銀時には分からない。

でも、その言葉に今まで入っていた力が抜けるような気がした。

優しいかぜが、頬を撫でた。
ふんわりと、金木犀の甘い香りがする。

すう、と自然に目が閉じた。

「……時。……銀時」

松陽が呼ぶ声で目が覚めた。

「着きましたよ。今日からここが、銀時の帰るところです。」

目の前には、綺麗な黄金色の実をたくさんつけた田んぼ。
その奥に、立派な屋敷が建っていた。

帰る場所（後書き）

次こそは……桂さんや高杉を出したいと思います！
うあああああ！（叫）

初めての笑顔（前書き）

アクセス数が100未満から160になりました！

どれもこれも皆様のおかげです。

ありがとうございます！

目標500^^

初めての笑顔

屋敷に着くと、松陽はちょっと待ってて下さいね、と言って奥へ向かった。

しばらくすると、小さな器を持って戻ってきた。中に何か入っている。

―この赤くて、きらきらしているのは何だろう？

自分の知っている「赤」とは違う。

もっと鮮やかで、優しい色だ。

少し見とれていると、松陽が

「おいしいですよ。食べてみて下さい」

と言った。

「食えるときに、食つとかないとね！」

というどこぞのホームレスと同じ座右の銘(?)を持っていたので、がつがつと食べ始めた。

松陽は苦笑して、

「教える事は沢山ありそうですね……」

とつぶやいた。

でも。

「……うめえ」

そう言つて初めて笑顔を見せた銀時を見たら、まあ良いか、と思えてしまった。
思わず目を細める。

「銀時」

「……ん？」

「私のやつている寺子屋に通つてみませんか？」

「てらこや？」

「学問や剣術を教わる所です。銀時と同じくらいの年の子がたくさんいますよ」

「……」

同じ年と聞いて、あの土佐弁の少年を思い出す。
でも、また鬼と呼ばれて嫌われるのでは、という恐れの方が大きかった。

「大丈夫です」

銀時の気持ちが通じたように、松陽が言った。

「人間ですから、もちろん気の合わない人もいます。でも、きっと友達もできますよ」

少し考えて、

「うん……てらこや、行ってみる」

と銀時が言つと、松陽は喜んで、

「では、早速明日から行きましようか」

と言つて、いそいそと教本の用意をし始めた。

そして、翌日。

松陽に貰った刀を握りしめて、銀時は教室の前に立っていた。

部屋の中からは、にぎやかな子どもの声が聞こえる。

横にいる松陽が、くしゃりと猫の毛のような銀髪を撫でた。

「大丈夫です。……ほら、肩の力を抜いて。気楽に、気楽に」

にっこりと微笑む。

「……じゃあ、いきますよ?」

松陽はいよいよ、教室の障子をあけた。

初めての笑顔（後書き）

この話を投稿するまでの間、かなり騒ぎました。
なぜなら……

小説を書きあげ、「投稿」をクリック 確認のページで間違い発見
前ページへ

戻ったら……消えたあああ！

2時間程費やしたものが見事に消え去りました。

おまけにママ上からお風呂に入るよう言われました。ナイスタイミング。

「更新するからね！」と言ってしまった友人の皆様。

ごめんなさいです勘弁して下さい！orz

友達の印（前書き）

うつきゃああ！>U<

初めてコメント頂きました！！

ありがとうございます！

浮かれちゃうこんな時こそ戸締り用心火の用心！

…… 実際今朝は鍵を無くしかけましたΣ（-|-;-）

友達の印

教室が一気にしん、と静まり返った。

全視線が一斉に銀時に注がれる。

緊張で、動きが油の切れたブリキ人形みたいにぎこちなくなる。

「坂田銀時君です。今日から皆さんと一緒に過ごします」

松陽が銀時に目配せをした。

「坂田銀時です。よ、よろしくおねがいします」

松陽から教えられた通り、自己紹介をする。
が、反応はない。

と言うより、みんな銀時の銀髪に注目しているようだ。

「銀時」

松陽が用意した教本を渡した。

大丈夫です、と言い聞かせるように微笑む。

「では、銀時はあちらの席に着いてください……はい、そこです」

縁側に近い、一番後ろの席。

その席に着くと、隣の席の少女がじいつ、と銀髪を見た。

銀時よりも少し幼いだろうか。深い海のような色の目をしている。

「わあっ……」

―ああ、また何か言われるのか。

銀時は小さなため息をついた。

でも、少女は銀時が驚くような事を言った。

「すっごくきれえ……」

……え？

今こいつ、なんて言った？

……「綺麗」？

自分の、この髪が？

誉められた事なんてないので、どう対応していいか分からない。
本当にそう思っているのか、疑ってしまっただけだ。

幼い子供特有のキラキラした視線で見られたので、思わず目をそらせる。

「天人くあまんと」というのは、宇宙人のようなものです。最近地球にやってきて……」

松陽の低い、落ち着いた声が、眠気を誘う。

「しかし、天人全員が……訳では……ません」

暖かい秋の日差しがよく差しこんでくる。
緊張のピリピリ感がピリピ感になり、そのうちピ感……。

「銀時っ！」

少女の声で目が覚めた。

「もう休み時間！遊ぼ！」

もう起きてはいるのに、ゆさゆさと銀時を揺らす。

「ぬほっ、ふわふわ！」

銀髪をぽふぽふと触る。

少女がはしゃいでいるのを見て、銀時は猫を思い出す。

されるがままになっていると、長い黒髪を高い位置に束ねた少年がやってきた。

「お、汀くみぎわく、もう仲良くなったのか？」

「みぎわ……？」

「ん？なんだ、まだ自己紹介もしてなかったのか」

「あ、まだだった。潮野汀くしおのみぎわくです。よろしく！」

「俺は桂小太郎だ。」

よろしくな、と桂が手を差し出した。

「……なんだ、手を出したら普通握手だろう」

銀時が戸惑っている、桂が少し苛立ったように言った。

「『あくしゅ』って、なんだ？」

銀時に真顔で聞かれて、桂は困ってしまった。

「友達のしるしだよ！」

汀が元気よく答えた。

銀時の手をとって、桂の手をつかませる。

「これで、友達！」

にこにこしている汀を見ると、今度は紫の髪をした少年がやってきて、

「お、早速仲良くなったのか」

と桂と全く同じことを言った。

「それは俺がさっきいったぞ低杉」

「誰が身長低すぎだボケ」

「ボケじゃないヅラだ！間違った桂だ！誰も身長とは言ってなからう」

「確かに言ってねえけどそれ以外にねえだろうが！！」

「銀時……と言ったな。こいつは低杉と言ってなア……」

「ちげーよ！高杉！高杉晋助！ちなみにこいつアヅラだ」

「ヅラじゃない桂だ！くれぐれも間違いのないようにな！」

「……よろしくな、ヅラに低杉」

「だからちげーつつてんだろ！」

「だから違つと言っているであろつー！」

打ち合わせでもしたみたいに、息がぴったりである。

「銀時」

松陽が話しかける。

「気の合う……くっ、友達が……ふへっ、できたようで……ふっ、良かった……ふはっ」

「……先生、恥ずかしいんでこらえないでいつそ笑い飛ばして下さい」

松陽には、さっきのやり取りが面白かったようである。

「この二人、いつもこうなんだよ」

「汀！余計なことを言うな！」

「あ、それにねー……むがっ」

桂と高杉が一斉に汀の口をふさぐ。

「頼むから黙ってくれエエ!」

銀時が笑いだした。

松陽は安心して、良かった、とつぶやいた。
これなら、心配しなくとも大丈夫だろう。

「皆さん、そろそろ授業を始めますよ!」

生徒達が口々に返事をしたりしながら、席に戻って行った。

友達の印（後書き）

浮かれちゃだめだと書いた矢先にジュースの入ったコップを倒しました。

この小説並みのタイミングの良さはなんでしょう……？

それと忘れてはいけない事がもう一つ！

「ピリピリ感がピリピリ感になって……」はある小説の表現をお借り致しました！

分かる方には分かります……。

「また明日」(前書き)

前回の話で、サブタイをつけ忘れてまた全消しです……(泣)

一応wordで保存するようにはしましたが……

どなたか一旦保存してから投稿する方法があつたら教えて下さいO

r
z

「また明日」

「銀時！一緒に帰ろ！」

授業が終わって、汀が言った。

（今日からここが、銀時の帰るところです。）

松陽の言葉を思い出す。

「……ここが、帰るところ」

「……え？ここ、銀時の家なの？」

「……うん」

「へえっ！すごい」

何がすごいのか分からないが、少し得意になる。

「汀、帰るぞ」

桂が来て言った。

「銀時の家はどこだ？」

途中まで一緒に行こう、と銀時も誘った。

「ここが銀時の家だってー！」

汀が答えた。

「そうなのか！松陽先生に子供がいたなんて初耳だが……」

桂が不思議そうな顔をする。

「まあどっちにしろ、高杉には言わない方がいいぞ。」

「え？なんでだよ」

「あいつ先生命だから羨ましがられるに決まってる」

「そそそそういうことは言うなコノヤロー！」

高杉が突然話に入ってきた。

「わぁ、地獄耳」

「うるせエエ！ちよっ……恥ずかしいだろーがアア！」

顔を耳まで真っ赤にして高杉が答えた。

「晋助」

丁度いいタイミングで松陽が来る。

某水泳選手ではないが、高杉は何も言えなくなる。

「小太郎に、汀も」

……どうやら、聞いていた訳ではないらしい。

「実は、銀時の事で知っておいてほしい事があります」

そう言うのと、銀時の事を話し始めた。
鬼と呼ばれていた事、ずっと一人で生き延びてきた事、大変な思いをしていた事。

そして、刀の本当の使い方を学びに自分に付いてきた事。

「……じゃあ、お前強いんだろ？」

意外にも、高杉が口を開いた。

「先生、明日は剣術の授業ありますか？」

「ええ、ありますよ」

「じゃあ、明日俺と勝負な！」

びしっ、と指をさした。

みんな初めはきょとん、としていた。

でも。

（……ああ、そういう事ですね）

松陽には分かった。

銀時を認めてくれている、と。

「また明日」と言うのは、晋助なりの友達の印だ、と。

銀時にも分かってきたようで、

「……分かった！また明日な！」

銀時が笑顔で言った。

銀時に少しずつ、笑顔が増えてきた。

「私もしょーぶ、したい！しよう！」

汀が言った。

「え……」

思わずためらう。

「言つとくけど、汀も結構強いからな」

晋助が言った。

「汀『も』って、貴様も強いみたいではないか」

「あああたり前だろ！」

「……前私に負けたよね」

「それはあの一回だけだろ！！つーかお前雰囲気変わってるし！」

「貴様は動揺し杉だ」

「ボケたいのか突っ込みたいのかどっちかにしろツラァ！」

話しているうちにすっかり日も沈んでしまった。

「まずいぞ高杉、早く帰らないと父上の雷が落ちてしまう」

「そうだな……汀も帰るぞ」

「うん」

大急ぎで支度をする。

「……また明日」

「じゃあな、また明日」

「またね、銀時っ！」

桂、高杉、汀の順に言った。

「……またな！」

銀時が思いつきり手を振って言った。

ガラガラ、ピシャンと戸を閉める音がやけに響いた。

「……」

なんだか冬の初めに戦場にいた時みたいな、不思議な気持ちになった。

それが「寂しい」という感情だと、銀時は気づかなかった。

「また明日」(後書き)

次は高杉と銀さんの試合です！

汀とも試合する予定です。

……よし、迫力を出すよう全力を尽くします！

初稽古（前書き）

更新がだいぶ遅れました……すみません！Orz
アクセス数ついに260突破！

皆様のお陰です、ありがとうございます！ω

話は変わりますが……昨日銀魂38巻買いました！
ゆめじゃないです

夢邪亡居出須……（笑）

初稽古

翌朝。

道着に着替えてみんなが集まった。

みんな道場で和やかに話しながら松陽を待っていたが、高杉と汀だけはライバル心むき出しで銀時をにらんでいる。桂は慣れているのか、そんな二人を見てもまったく動じない。

（いやいや待て、これ普通なのか？）

と内心焦りながら思わず目をそらす。

……だってなんか、今まで会った奴より怖エんだもん！
なんか「ゴゴゴゴ」って聞こえんだもん！

「おはようございます。遅れてすみません」

松陽が入ってきた。

おはようございます、とみんな元気に挨拶した。

「それでは、早速始めましょうか」

高杉の発する気（というより、もはや念に近いもの）に気付いて、

「では、晋助と銀時から」

とややひきつった笑顔で言った。

二人が前へ出ると、みんな興味津津な目で一斉に二人を見た。

「構え」

高杉が竹刀を構えたのを見て、銀時も構える。

よく張った弓のような、張りつめた空気が流れる。

「用意……始め！」

早速銀時がかかって行つた。
パン、と竹刀の音が響く。

「やるなア銀時」

「お前もな……低杉」

「うるせエエ！」

高杉が銀時の竹刀をはじく。

そのまま大きく踏み込んできた。

「！」

なんとか竹刀で防ぐ。

「てめエ低杉呼ばわりしたからにはッ……」

ぎり、と竹刀が音を立てる。

「……ボコボコにしてやるかな！」

パン、と高杉が竹刀を払う。

自分の剣とは違って、動きにしっかりと筋が通っている。

体勢を低くして、素早く足を払う。

不意打ちを食らった高杉が転ぶ。

「ってエ！何すん……」

振り向いた瞬間。

「！」

高杉の喉元を狙って、銀時が突きを繰り出そうとしていた。

「そこまでです！」

松陽の声と、ダンッ、という音が同時だった。

「危ねー……」

竹刀が突いていたのは道場の床。

高杉の喉との距離は、わずか数センチ。

よく見ると、竹刀の突いた所だけへこんでいる。

（嘘……だろ？）

竹刀を持つ手が震える。

（俺……今コイツを……）

「……銀時？」

銀時の手が震えているのに気づいて、高杉が言う。

「銀時」

松陽が少し厳しい声で呼ぶ。

「今日は一旦見学しなさい。……後で個人授業です」

力なく頷くと、邪魔にならない様道場の端に移動した。

「……」

やや気まずい空気が流れたが、松陽の合図で稽古が始まった。

その日の夕方。

「では、そろそろ始めましょうか」

胴をつけている銀時に対して、防具一つ付けていない松陽。

―また、ああなったらどうしよう……？

「僕を殺してしまったらどうしよう、と？」

銀時の考えを見透かしたように松陽が言う。

「そんな心配いりませんよ」

竹刀を取って、銀時に向って放り投げる。

「全力でかかってきて下さいね」

たん、とためらいながら銀時は踏み出した。

おまけと言つ名のお詫び

東北・関東大震災から一週間が経ちましたね……。

遅れてしまいましたが、皆さんはご無事でしたか？（-_-;）
私の住んでいる所は被害は少なかったのでひとまず無事でした。ほ
つ。

さて、題名にもある通り……まず「お詫び」です。

活動報告には書いたのですが……

地震でパソコンが大事な情報源となり、あまり使えなくなってしま
いました！

携帯からもいろいろと訳あつて投稿できません……。

なので、しばらく連載を休止させて頂きます！

この機会にたくさん書きためておこうと思うので……。

そして、「おまけ」ですが……

ここからは銀時達にお願いしたいと思います！

せーのっ、「銀と……」

銀「お母〇んと一〇みたいなノリで呼ぶなアア！」

桂「まア良いではないか」

高「って言うか伏字の意味あんのかソレ」

桂「とりあえず本題に入るぞ。（カンペ上がる）えー、『おまけ』
と言っのは……」

汀「私の絵をつけたよー!」

桂「オイいいいい!俺の台詞を返せエエエ!」

銀「作者がパソコン使えるわずかな時間に頑張って投稿したぜ。
……はい、いくぞー」

全員「「「是非見てください!」」」」

> i 1 9 9 9 1 — 2 7 1 3 <

個人授業（前書き）

こんにちは、脳内メルtdown中の空野です。ただちに影響はないんだぜ！

お久しぶりです！！

♪ 会いたかった〜、会いたかった〜、会いたかった〜、YES！！
♪ 会いたかった〜、会いたかった〜、会いたかった〜、YES！！
読者^{きみ}に〜〜〜〜！！

……あれ、こんな歌でしたっけ……？

個人授業

「それでは、かかって来て下さい」

全力でね、と松陽はいった。

銀時の竹刀を持つ手が少しだけ震える。

「大丈夫です。……あなたに私は殺せない」

一体どこから湧いてくるのか、松陽の表情は自信に満ちている。

たんっ、と踏み出した。ぱしん、といとも簡単に受け止められる。
たん、ぱしっ、たん、ぱしっ……

何度も単調な動きを繰り返すうちに、銀時の打つ力が段々強くなる。
我流の荒い剣だが、ここまで自分の身を護って生きてきただけあって
威力がある。

松陽でもまともには受けきれなくなって、落としかけた竹刀を握り
直そうとした。

ちょうど竹刀が銀時の顔の方を向いた。

それを見た途端、銀時は一瞬、ビクッと肩を震わせた。

子供とは思えない力で松陽を押し倒すと、竹刀を松陽の首もとに叩
きつけた。

「ほら、ね？」

松陽は落ち着き払って微笑んでいる。

竹刀は松陽の首の横に叩きつけられていた。

「銀時、気付いてますか？あなたはちゃんと自分の動きを制御できてますよ」

「……そんなはずない」

現に今、松陽を危険な目に合わせたのは自分。
そう言われても、慰めとしか思えない。

「一瞬、もう駄目かとも思いました……でも、今僕は生きています」

銀時が竹刀の軌道を変えたからです、と松陽が言う。

松陽でさえ避けられなかった速さ。

銀時自身が竹刀の動きを変えなければ、本当に危なかった。

「僕の竹刀が銀時の方を向いて、反射的に動いてしまったのでしょ
う？」

こくり、と銀時がうなづく。

戦場では剣を向けられれば、すばやく応戦しないといけない。

少しでも反応が遅ければ、命にかかわるのだ。

そんな環境で生きてきた銀時は、敵はとにかく斬る、という本能に近いものが身体にしみ込んでいた。

それが銀時は悲しくもあり、悔しくも感じるようになっていた。

「己じゃない、己の魂を護るための剣を目指すと言ったはずです」

松陽は立ち上がり、真剣に話しかける。

「あなたの剣はまだ、己を護る剣です。……でも、焦る必要はありませんよ」

少しずついい、きつと変われます、と安心させるように言った。

ぽふっ、と腹のあたりに、銀時が飛び込んできた。

松陽の着物の裾をつかんでいる。

松陽は銀時の頭を、くしゃくしゃと撫でた。

「大丈夫ですよ」

どんな人の言葉よりも、不思議と信じてしまう言葉。それはきつと、松陽自身が心からそう信じているからなのだろう。

松陽を見上げた赤い瞳は、ほんの少し濡れていた。でもその表情は、どこか晴れやかなものだった。

「よし、これで授業は終わりです！」

松陽がにっと笑って言った。

道場の外へ出ると、空は綺麗な緋色に染まっていた。

「夕ご飯は、何が良いですか？」

「あ、あれがいい！赤くてきらきらしてるやつ！」

「え？赤くてきらきら……？」

銀時の説明を聞いてるうちに、初めて来たときにあげた苺の事だと分かった。

「あれはご飯じゃありませんよ！」

やっぱり教える事は沢山ありそうですね、と思いながら、松陽は笑った。

こんな穏やかな日が、ずっと続いて欲しい。
ふいになぜか、そんな事を思った。

個人授業（後書き）

遅れましたがアニメ銀魂復活おめでとう！！
歌舞伎町四天王篇、かつこよかった……！
パソコンで見てるのですが、なんと！！
再生数：0回つてなってたんですよ！！
姉と二人でお祭り騒ぎでした（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8911q/>

白夜叉降誕

2011年8月22日21時05分発行